

# 露都雜記

二葉亭四迷

青空文庫



ネミローウ<sup>ウ</sup>斗<sup>チ</sup>、ダンチエンコ氏が日本のさる田舎<sup>みなか</sup>の停車場<sup>ステーション</sup>で、何心なく汽車の窓から首を出すと、その柵外に遊んで居た<sup>はなつた</sup>渾<sup>はなつた</sup>垂<sup>た</sup>らしの頑童<sup>わんぱくども</sup>共が、思ひがけず異人馬鹿と手を拍<sup>う</sup>つて<sup>はや</sup>囃<sup>はや</sup>したので、氏は驚いて首を引込めた事がある。それからはこの「異人馬鹿」が耳に附いて、京都の秀麗な山河に対しても、宮島の美景を望んでも、之を想ひ出すと、一種の苦い感じが夕立雲の空に拡がる如く急に心頭に掩<sup>おほ</sup>ひかぶさつて、折角の感興も之が為<sup>ため</sup>に台なしにされたとかで、氏は直<sup>たゞち</sup>に之を日本人の排外思想と見<sup>み</sup>做<sup>な</sup>し、日本に可<sup>あた</sup>惜<sup>ら</sup>疵<sup>きず</sup>の随<sup>ず</sup>一<sup>いっ</sup>に算<sup>かぞ</sup>へてゐられる。

その事はルースコエ、スローウオに連載された氏の紀行にも出たので、当地の各新聞は珍らしい事にして皆其の一節を転載する、それで一時<sup>ちよつと</sup>一<sup>いち</sup>寸<sup>すん</sup>之<sup>し</sup>が評判になつて、逢<sup>あ</sup>ふ人が皆其の事を言ひ出すので、僕はお蔭でうるさい想<sup>おもひ</sup>をさせられた。

ダンチエンコ氏は田舎の停車場で子供に調<sup>から</sup>戯<sup>かは</sup>れたのだが、此の頃のノーウオエ、ウレミーヤを見ると、去年の天長節に東京の真中で、しかも大学生に異人馬鹿といはれた露西

巫人がある。それはこの新聞の通信員で「F. J.」といふ男である、余り不思議の話だから、念の爲其通信の一節を左に抄訳する。

群集に誘はれて余等（独逸人某と此の通信員とだ）も前へと進んだ、行けば行く程人氣はたつみ上つて、其処にも此処にも万歳の声が聞え、狼烟がしつきりなく上る、と数名の大学生が人浪を押分けつゝ余等の側を通りぬけんとして、無作法に余等の面を眺めて、「異人馬鹿！」と叫んだ、其処らの者一同之に声を合せて動揺めく。

明治四十一年の大学生が外国人を呼んで異人といったとは、古今の珍聞といふべしだ。が、珍聞はこればかりでなく、此の通信員が旗行列か何かの跡について行くと、皆「万歳（御名）！」と叫んだといふ、グード、モーニング、ヂヤ、リットルジョンの格だが、ウラー、ニコライとは此方でも聞かぬ事で、これも古今の珍聞だ。

概して此の通信は珍聞に富んでゐる、いや、珍聞だらけでうツかり足を踏込むと珍聞を踏んづける程だが、其の中で珍の珍たるものは、大方此の旗行列は戦勝の名誉を表彰する神社などへ行く事だらうと思つて跡について行くと、吉原といふ処へ来たとある、文章の続柄さうより外には取れぬ、で、吉原の景氣を叙するあたりにも大分珍聞もあるが、それは省略して、此通信員連の独逸人とトある格子先に立つた……とは書いてないが、立

つたに違ひない。すると妓夫ではなくて此の家の亭主が側へ来て、文明な露国ではとても聞かれぬ尾陋びろう千万な事を野蛮な日本人だから平気で陳のべて遊興を勧める。それを通弁に取次がせて聴いてみると、恰あたかも此の時丁度その格子先の往来で大道演説が始まった、弁士が入替り立替り愛国心を鼓舞したので、万歳と異人馬鹿の叫び声は次第に烈しくなり、遂に一同ちぐはぐの声で歌ひ出すのを聴くと、

「ニポン、カタ、

ラシヤ、マキタ」

通信員は事実有つたに相違ない此の事実の意味を説明して、之はミカドの生誕日を祝する為貴賤を挙こぞつて此処に集つた東京の住民が、日本の輸出品中最も売行の好い代物しろものを眼前に見て意気頓とみに揚りそこで愛国的演説をはじめ、外国人を罵ののしり、日本の光榮ある将来に望を属したのである、といつてゐる。事実が既に珍無類だから、説明も亦珍無類またである。で、その次にかうある――

「皇帝の誕生日は今歳ことしは東京ではかうして祝されたのである。

是こゝに於て余は独逸人に一問を足した、若し伯林ベルリンでカイゼルの命名日に、何人なんびとかかゝる処で愛国的示威運動を企てたら、独逸の警察や社会は果して之を何といふであらうか

と。

流石<sup>さすが</sup>日本<sup>びんぎ</sup>最<sup>さい</sup>良<sup>りやう</sup>の独逸人も此の時ばかりは唾然として答ふる所を知らなかつた。」

ノーウオエ、ウレーミヤの社中には常識に富む紳士も少くない。その堂々たるノーウオエ、ウレーミヤがかういふ通信員のかういふ通信を平気で掲載する真意は僕も知らんが、しかしかういふ通信が保守臭味の露国人に一般に歓迎せらるゝのは事実である、需用の在る所供給之に従ふ。

## 二

ネミローウオチ、ダンチエンコ氏が東洋漫遊より帰らるゝや、旧情を温め<sup>かた</sup>旁<sup>かた</sup>々<sup>々</sup>一夕僕は氏をニコラーエフスカヤの其の宅に訪うた事がある。其の時既に先客があつて頻<sup>しき</sup>りに感心して氏の日本談を聴いてゐる所だつたから、僕も他人の興を妨げるでもないと思つて、挨拶<sup>あいさつ</sup>が済むと、黙して矢張り氏の日本談を聴く身となつた。按<sup>あん</sup>ず<sup>ず</sup>に氏は決して雄弁家ではない、いや雄弁家の沈着を欠く。感じ早い氏の頭に驚くべき速力を以て僅少の時間内に弥<sup>いやうへ</sup>が上<sup>うへ</sup>畳<sup>畳</sup>み込んだ日本の百千の印象が今其の一端を抓<sup>つま</sup>んで引越して見ると、ぞろゝと釣

し柿のやうに連がつて際限なくめぐれて来るから、氏は殆ど始末に窮せられるらしい。其結果狼狽せられる、で、今山の話をしてゐられるかと思ふと、忽ち川の話になる。それもドボンと不意に川に陥つたやうに其話に移るので、聴手は一寸呆氣に取られてゐる中に、話は一蹶して向岸に躍り上つてしまふ事がある。

僕は氏の日本談に横槍を入れるどころでなかつた、流石に意見を異にする点もないではなかつたが、それを言はうと口をむくつかせてゐる中に、話が狂奔して別事に移るから、此方も喘ぎ々走つて其の尻に附く、なか々口を開く暇がなかつたが、其の中にフト例の異人馬鹿の話になつた。

其の時ダンチエンコ氏は僕を顧みて、ニツコリして、  
「この彼得堡ペテルブルグでそんな悪口を聞く事は無いでせう？」

無論ないといふだらうと予期してゐられたのだらう。僕が有るといふと、眼を円まるくして、  
「え、有る？……」

「有りますとも、不断の事だ！……」

「そ、そ、それは怪けしからん！ どんな悪口を？……」

それから僕は此の地着以来の経験を語つた。

僕は元來散步嫌ひの男だが、こゝへ来てから急に散歩好きになつたのぢやない、部屋の構造が冬向一方だから、空気の流通が頗る宜しくないで、外出して比較的新鮮の空気を呼吸せざるを得んだ。しかるに外出すると、毎度悪口を言はれる、外出の方面によつては、出る度といつてもよろしい。

人の面をぢろくゝ視て「支那人が通る」は無礼に相違ないが、まづ悪口の部には入れない。が中には凶星日本人と見て取て、ヤポーシカが通るといふ。ヤポーシカとは我國の露助と同格で、日本人の賤称だ。複数だとヤポーシキとなる。之をヤポンスキイと間違へて単に日本人の事だと思ふ人が露語を知らぬ人に多いやうだが、大間違で、ヤポンスキイとは日本のといふ形容詞で日本人の事でない、日本人の事は露語ではヤポーネツといふのだ。

(明治四十二年三月十七・十八日)



# 青空文庫情報

底本：「現代日本文學大系 Ⅰ 政治小説・坪内逍遙・二葉亭四迷集」筑摩書房

1971（昭和46）年2月5日初版第1刷発行

1971（昭和46）年12月30日初版第2刷発行

入力：高崎隼

校正：hitsuji

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 露都雑記

## 二葉亭四迷

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>